

目次

- ・ 第2回例会報告
国立子ども図書館構想 -過去・現在・未来- (田中久徳)
「近代日本図書館年表」の作成と課題 (奥泉和久)
- ・ 第13回研究集会・総会
- ・ 編集委員会、事務局より

第2回例会報告 (1996年3月16日 国立国会図書館)

国立子ども図書館構想 -過去・現在・未来-

田中 久徳
(国立国会図書館)

1. 現在の状況をどう考えるか？

1993年の「子どもと本の出会いの会」の発足以来、国立の子ども図書館（児童図書センター）の設立を求める動きが活発に展開され、国立国会図書館支部上野図書館に児童書のナショナル・センターを設置する構想が進められている。これは、現象的には、ごく最近の急激な動きに見えるが、国立国会図書館（NDL）における児童書問題の歴史的経緯をたどるならば、決して唐突なものではない。

米国議会図書館児童書センター長のシビル・ヤグッシュ女史は、一昨年（1995年）の来日時の講演で、米国の児童図書館の発達は、①全国の公立図書館で児童奉仕が行われるようになる、②児童奉仕に携わる専門の児童図書館員の養成機関ができる、③良質の児童出版が盛んになる、④国のセンターができるの4段階を踏むと総括された。彼我の状況の差を先進・後進の関係で単純化するには多少無理はあろうが、我が国の状況もこの4つの段階に沿って展開しているように思われる。（ちなみにLC児童書センターの設置は1963年）。

NDLでは、1968年に利用不能状態に「死蔵」されていた児童書の公開問題が起こり、児童関連諸団体からの要望を受ける形で、児童図書目録の作成と閲覧再開を実施した経緯がある。その後、児童文学研究者、鳥越信氏のコレクション受入による大阪国際児童文学館の開館（1984年）、都立日比谷図書館の建て替えに伴う都立「国際子ども図書館」構想（1990年）など、地方自治体による「児童書センター」機能の実現が進み、NDLに対する要望は小休止する形になっていたが、児童文学館の運営をめぐる大阪府と鳥越氏の対立や財政難による都立構想の撤回など、自治体レベルの事業基盤の不安定さや限界（他地域へのサービスの制約など）が次第に明らかになる中で、国レベルでのセンター機能の実現を国（文部省、NDL）に求める方向への回帰が強まり、80年代からのいわゆる「子どもの本ばなれ」の状況と呼応して、今回の一連の要望の展開をみるに至ったものと考えられる。

2. 国立図書館（納本図書館）における児童資料の位置

これまで、国立図書館（納本図書館）としてのNDLは、児童対象資料についての調査研究センターとしての機能や児童図書館サービスに携わる専門家支援を十分に果たしてこなかった。これは、限られた資源配分の優先順位の問題ではあるが、利用者を成人に限定する構図の中で、児童資料の位置づけが一見わかりにくい（大人が子どもの資料を利用することが理解されにくい）ことがあり、さらに、その背景には、児童資料を一段価値の低いものとみなす社会的風潮が影響していた。

旧帝国図書館は「遠大該博」な参考図書館への志向が強く、「小説は士君子の読むべきものにあらず」（田中稲城館長）として、「児童物」を含む「通俗書」への理解が乏しかった。同館の蔵書は、旧内務省からの検閲資料の交付資料により、その中核が構築されていたが、児童資料は「通俗読み物」として、一般の利用には供しない資料（乙部資料扱い）とされ、さらに児童雑誌に至っては、その大半が収集されておらず、研究者からは（戦前の蔵書を引き継いでいるはずなのに）「あるべきものがない国会図書館」という評判を得るような状態であった。

戦後のNDLの発足後は、資料収集面では戦前ほどの他の資料群との格差は縮小したが、整理や利用体制では、十分な手当てがなされず、少なからぬ混乱が見られた。特に、1956年度～1959年度に実施された児童図書館の団体特別貸出制度（公共図書館等へ500冊セットで半年の長期貸出を実施）は、貴重な納本資料の汚損や散逸を招く結果となった。その後、児童資料は閲覧利用のできない状況が続き、1968年5月、児童文学研究者の滑川道夫氏の新聞投稿を契機に利用体制の整備に対する要望が高まり、「児童書公開運動」と呼ばれる動きが展開していった。

3. 児童資料のナショナル・センターの意義をどう考えていくのか

帝国図書館、NDLと続く日本の国立図書館の歴史の中で、児童資料は「泡沫」扱いを余儀なくされてきたが、一方、児童資料のセンター機能の充実を求める運動がたゆまず続いてきたこともまぎれのない事実である。その意味から、現在の「国立子ども図書館」構想の動きを過去から未来に至る長い歩みの中での1つの段階として理解することが重要である。

米国の書誌学者ローゼンバッハは、「児童書は他のどのような資料よりも忠実に時代の精神を映し出す」ものであると述べている。その意味では、児童資料のナショナル・センターは、子どもと本を結ぶ社会的力の拠点であるとともに、歴史家、教育者、作家、画家、編集者といった広範な立場の人々に時代の文化遺産を提供する機能もあわせ持つことを忘れてはならないであろう。

新入会員

「近代日本図書館年表」の作成と課題

奥泉 和久

(横浜女子短期大学図書館)

1. 図書館史と「図書館年表」

わが国の(主として公共)「図書館年表」で、全国的に記述されたものでは、旧くは『〔図書館〕総覧』に「図書館年表」(青年図書館員聯盟、1938)があり、近年では『図書館ハンドブック』(第5版、日本図書館協会、1990)に「年表」がある。県別のものでは、各県単位で「図書館史」がまとめられる際に、年表が作成されている。

『近代日本図書館の歩み』(本篇・地方篇、日本図書館協会 1992-93)は、それらの資料を参考にして作成された。筆者は、「年表」の執筆・編集を担当したが、とくに「地方篇」では、①同書の性格上、本文の記述を重視せざるをえず、付表的な色彩が強く、独立性に欠け、②歴史研究の未整理な点も多く、戦後の各地の図書館活動を十分反映できず、③時間的な制約から、「本文」の記述をそのまま記載した場合もあり、出典を正確に把握しきれなかった。など、いくつかの問題を残したと考えている。

それは、「図書館年表」がこれまで、図書館の歴史(本文)の記述の補足的に扱われていたこと、また地方の場合どうしても対象が県立中心になり、市区町村まで調査が及ばない。図書館の設立・変遷が中心になり、図書館活動(運動)が十分発掘されていない。メディアの変化と図書館との関係がとらえられていない。など、図書館についての歴史認識に原因があったとも考えられる。

「年表」は、各地の図書館の動向(活動)の問題のみならず、その地方における過去の研究蓄積にも大きく左右される。また、全国的な視野に立てば、サービスの変遷や整理業務、目録など図書館業務の個別的な課題(歴史の変遷)についてはほとんどといってよいほど調査がすすんでいない。新しい視点がのぞまれる。

2. 「図書館年表」の作成と課題

現在、以上の反省点をもとに「近代日本図書館年表」(仮称)の作成に着手している。<記述の範囲>は公共を中心に、国立、大学、学校、専門、図書館協会の活動など。メディア史などの関連分野との関わりも、視野のなかに入れる。<収録範囲>は、1868~1995年の近・現代。図書館に関する事項(設立、運動など)、とくに戦後の運動を位置づけることに主眼を置く。<記事の採取>は『図書館雑誌』を中心に、主要図書館関係雑誌、地方図書館史、主要図書館報、地方図書館協会報、地方史(誌)、地方教育史など。

1992年6月に第1回打ち合せを行い、現在分担して項目の執筆をすすめ、97年秋に出版を予定している。今後、図書館の研究者の方々、図書館に関心をお持ちの方々の協力を得ながら作業をすすめていきたいと考えている。

同年表編集委員会・代表は小川徹(法政大学)、事務局・長田薫(浦安市立図書館)。

1996年度日本図書館文化史研究会 第13回研究集会・総会
- 参加者の募集について -

日本図書館文化史研究会では、下記の要領で研究集会・総会を開催します。研究集会の参加希望者を募集します。

記

日時 : 1996年7月13日(土) - 14日(日)
会場 : 大阪府立大学学術交流会館 堺市学園町1-1
(大阪地下鉄御堂筋線中百舌鳥駅より徒歩15分)
参加費 : なし

プログラム

メインテーマ：“図書館思想の形成”

① 1日目

12:30~13:20 受付
13:20~13:30 実行委員会、開会の挨拶

13:30~14:30 講演 天満隆之輔「ヨーロッパ近世における図書館思想の形成」
14:30~15:20 発表1 田口瑛子「文献展望；ギャリソン著『文化の使徒』の評価をめぐって」

15:20~15:50 休憩
15:50~16:40 発表2 斎藤文男「多摩地区の逐次刊行物をめぐる諸相－過去・現在・未来－」（仮題）
16:40~17:30 発表3 深井耀子「トロント市立図書館におけるカナダ的アイデンティティの確立－公立図書館思想研究への一視点－」
17:30~19:30 懇親会

② 2日目

9:30~10:20 発表4 宇治郷毅「韓国における公共図書館と読書運動」
10:20~11:10 発表5 志保田務「図書館行政と整理政策、その結果を受容した整理のツール－主に日本図書館協会に注目して－」

11:10~12:00 チャットコーナー
12:00~13:00 昼食
13:00~14:00 総括討議
14:00~15:00 日本図書館文化史研究会総会（議案①1995年度活動報告・会計報告、②1996年度活動計画・予算案、③会の英文略称、④機関誌の発行および機関誌名、⑤その他）

各発表は40分として、質疑応答に10分をあてています。本格的な論議は総括討議に持ち越します。チャットコーナーは、情報提供・アピールなど希望者に10分から15分程度の発言をしてもらうコーナーです。

◇ 参加希望者は、<はがき>または<E-Mail>で5月末日までに、次の諸事項を明記して、研究集会・総会事務局まで申し込んでください。氏名、住所、電話番号、所属、懇親会参加希望の有無、14日の弁当斡旋の希望の有無。参加申し込み者には、6月上旬にプログラム・会場案内を郵送します。

◇ 7月13日終了後、懇親会を行います。会費 5,000円程度。なお、会場付近はとくに土日曜日に利用可能な食堂が少ないので、希望者には14日の昼食弁当を 1,000円程度で斡旋します。申し込みの際、懇親会と弁当の有無を明記してください。

なお、宿泊は斡旋しませんので、各自で手配してください。

『ニューズレター』第55号(1996.2.15) (1995.2.15は誤りです。申し訳ありませんでした)でご案内した、開催要領、宿泊関係記事 (p.6-7) もあわせてご参照ください。

研究集会・総会事務局

石井 敬三

職場

大阪府立大学総合情報センター

(研究集会・総会当日は土日
交換業務がありませんのでこの番号は使えません。)

~~~~ IFLA北京大会 図書館史ラウンド・テーブル (RTLS) について ~~~~

川崎良孝氏(京都大学)提供の、RTLSニューズレター No.6 (96 春号)によると、8月27日のオープンセッションに、現在3本の論文が寄せられている。そのうちの1本が、川崎良孝・山口源治郎・高島涼子「第二次大戦後の日本公共図書館学の史的展開」。他に「義和団事件の時の漢籍の破壊」、「韓国図書館学の史的展開」がある。

~~~~ 研究例会のお知らせ ~~~~

今後の予定

- | | |
|------------|----|
| ◇ 1996年9月 | 未定 |
| ◇ 1996年12月 | 未定 |

*詳しくは次号のニューズレターでお知らせします。

例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流(提供)などでも結構です。申し込みは事務局まで。

◇編集委員会より

『図書館史研究』第12号は、5月末に刊行の予定。もうしばらくお待ちください。内容は、下記のとおりです。

<第12回図書館史を考えるセミナー講演記録>

図書館史からみた“転換期”とは（石井敦）

状況から明日（あす）へ（前川恒雄）

アメリカ公共図書館とテレビ・メディア：テレビ出現期を中心に（吉田右子）

<研究ノート>北アフリカの図書館活動の歴史的背景：フランス文化の影響
（須永和之）

また、機関誌13号は（13号以降の誌名は総会で決定します）、今秋刊行予定で編集作業を進めているところです。

~~~~~  
**原稿募集**

◇ 機関誌14号（1997年9月刊行予定）の原稿を募集します。

400字で40枚程度。原稿のめ切は97年3月末。

投稿を予定されている方は「論題」を年内に、下記あてお知らせください。

採否は編集委員会で決定します。

**原稿の送付先**

小黑浩司

◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。

研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局あてお送りください。

◇事務局より

研究集会の申し込みの締め切りが近づいています。準備の都合がありますので、早めに申し込んでください。『図書館史研究』第12号がまもなく発行される予定です。95年度の事業がこれで一区切りつきます。第13号は機関誌名は総会で、決定されることになっていますが、会名の変更だけでなく、“図書館文化史”の名にふさわしい機関誌であることと“定期的”な発行のためにも、会員各位の積極的な投稿をお願いする次第です。

なお、会があらたまったことでもあり「会員名簿」を作成しました。訂正等ありましたら、事務局までご一報ください。また、異動などの際にもお知らせください。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明

## 研究発表の予定概要

田口瑛子（京都精華大学）

論題：「文献展望；ギャリソン著『文化の使徒』の評価をめぐって」

内容：『文化の使徒』に関する書評や引用件数の多さには目をみはらせるものがある。とくに論争をよんだ「第4部優しい技能要員」を中心とする、女性図書館員と図書館職の女性化の問題を考察する。また、ギャリソンを批判し乗り越えようとする女性図書館員に関する新しい研究についても触れたい。

斎藤文男（東京都立多摩図書館）

論題：「多摩地域の逐次刊行物をめぐる諸相－過去・現在・未来－」（仮題）

ねらい：1970年代～1990年代にかけての、東京・多摩地域における雑誌・新聞をめぐるサービスの変遷と地域内協力の達成度を明らかにする。

発表項目：Ⅰ.1970年代までの雑誌・新聞情況 Ⅱ.都立立川図書館（現、都立多摩）の雑誌図書館としての実践（実戦） Ⅲ.三多摩会の「公立図書館における逐次刊行物の位置付けの変遷について－東京・三多摩における一考察－」の目的と概要 Ⅳ.雑誌の貸し出し・予約とそれを支える都立の協力貸出 Ⅴ.協力レファレンスにおける雑誌・新聞の利用とその提供

深井耀子（椋山女学園大学短期大学部）

論題：「トロント市立図書館におけるカナダ的アイデンティティの確立－公立図書館思想研究への一視点－」

内容：カナダについて研究する場合、英米の圧倒的影響から脱して、カナダらしさをいかにして確立したかという点は、どの分野においても最も重要な論点と考えられている。英語系カナダを代表する公立図書館であるトロント市立図書館で、その点はどうだったのだろうか。その研究の第一歩として同図書館の年報 Reading in Trontoの理事会議長報告と館長報告における図書館観の変化を分析してみた。時期としてはカナダ生まれの専門職館長が就任する以前、すなわち1950年代までを扱っている。



宇治郷毅（国立国会図書館）

論題：「韓国における公共図書館と読書運動」

1994年制定された「図書館及び読書振興法」において、読書振興が公共図書館の任務の一つとして明記され、法律化された。国民運動化した読書振興運動の歴史的、社会的背景を探り、公共図書館の機能との関係を考察し、その実態を明らかにする。

志保田務（桃山学院大学文学部）

論題：「図書館行政と整理政策、その結果を受容した整理のツール－主に日本図書館協会に注目して－」

内容：図書館政策が整理方針、整理のツールに及ぼした影響について小察する。こうした政策・方針とツールの策定者としての日本図書館協会に注目する。ちなみに日本における整理のツール（NDC、NCR、NSH-BSHなど）は時代時代で異なる。それらは外側において互いに特徴を同じくする傾向にある。逆に、内側においては、前の世代のそのツールと厳しく対立する性格のものであった。粗くはこう一括できる。例えばNCRの歴史には、国際環境重視が交互現象として現れているし、NDCの諸版の間には書架分類表、書誌分類表の交互現象がある。これらの現象は、日本図書館協会の「整理」に関する思考軸の、一方の極限から他方の極限を往還する大きな振幅を示している。本稿は、こうした様相に対して、その判断機能の欠如を分析しようとするものである。